

二〇二二年一〇月一日

饒舌な幽霊もゐて村芝居
菊月の佳き日に迎ふ佳き嫁御
熊笹に足首切らる霧の道
古墳でて次の古墳へ秋の声
野分憎しドミノ倒しの稲田かな

凡士
千鶴
豊実
明日香
智恵子

二〇二二年九月三〇日
肌なずる風に夜ごとの秋気かな
雲ぬけていよいよ高し今日の月
藪からし鎧としたる遺跡かな
小鳥来る遠まなざしのガラシャ像

たか子
董雨
明日香
凡士

二〇二二年九月二九日
学び舎の裏門縷々と昼の虫
露天湯に我ただひとり寝待月
泥つきのままにひからぶ鴟の贅
客待ちのポニー秋草食んでをり
ゴッホの黄うち広がりし豊の秋
フェンス出て歩道にまろぶかぼちやかな
蹴散らしてバス駆けてゆく落葉道

満天
凡士
みきお
なつき
千鶴
やよい
せいじ

二〇二二年九月二八日
老ゆほどに母似といはれ小豆打つ
山の端の秋夕焼に一つ星
絶筆の十年日記身にぞ入む
登校子朝の挨拶さわやかに
合鴨の不意に顔出す稲田かな
涼しさにスキップ踏みつ流れ橋

こすもす
むべ
うつぎ
董雨
あひる
菜々

競落とすトロ箱の河豚大暴れ
被爆樹の二幹をつなぐ蜘蛛の糸
もの言はぬ力石撫ぜ秋惜しむ

智恵子
なつき
ぽんこ

二〇二二年九月二七日
また来てと貼紙のあり帰燕の巢
案山子にも手を振つて行く選挙カー
亀石を撫でて明日香の秋惜しむ
いぼむしり向けしカメラに斧翳す

隆松
うつぎ
明日香
豊実

二〇二二年九月二六日
皮剥きは夫の役割栗ご飯
観音の小首傾げる秋の声
露けしき草に覆はる摩崖仏
青空をそびらに笑める柘榴かな
爽やかや鳥語に目覚む山泊まり
ひろげたる両手いつぱい空高し

明日香
ぽんこ
宏虎
こすもす
やよい
素秀

二〇二二年九月二五日
浜焼きの鯛のけぶる九十九里
露草の瑠璃散らしたる野面積
黄落のベンチに集ひ将棋さす
力石喝と一太刀稲光
蹲踞に桔梗一茎明智寺
洞窟の湧水に聞く秋の声
橋桁に大集合す帰燕かな
敗荷や狼藉のごと水濁る

智恵子
むべ
もとこ
うつぎ
なおこ
ぽんこ
素秀
たか子

毎日句会みのる選・二〇二二年一〇月五日